Contact Zone 2019 書評

小林　誠著
『探求の民族誌――ポリネシア・ツバルの神話と首長制の「真実」をめぐって』

御茶の水書房、2018 年、定価 7,000 円＋税、236 頁

河野正治 *

本書は、ポリネシア地域のツバル・ナヌメア環礁における著者の調査研究（2005 年から 2010 年にかけて計 26 ヶ月実施）にもとづき、当該コミュニティにおける神話と首長制の探求について記述・分析する民族誌である。著者のいう探求とは「『真実』を明らかにしようとする意図的な実践」（4 頁：以下、本書の引用頁は数字のみを記載する）を指す。

本書の特徴は、本書に先行する民族誌――主にキース・チェンバースという人類学者が妻のアン・チェンバースとともに実施した調査研究の成果――が現地コミュニティにもたらした影響を視野に収めつつ、ミクロなポリティクスのなかで神話と首長制がいかに探求されてきたのかを詳細に描き出す点にある。人類学者と対象社会の関係をめぐっては、人類学者が現地コミュニティにどのように関与するのかについて語られることはあっても、人類学者の民族誌が現地住民の生にいかに影響を及ぼすのかが明らかにされることは必ずしも多くはない。その点、本書は、人類学者の手による民族誌が現地コミュニティにおける関係性の一部になる過程を明るみに出すものであり、オセアニア地域の伝統文化や政治制度に関心がある読者のみならず、人類学者と対象社会の関係について考えたい読者にも広く読まれるべき作品であると評者は考える。

さらに、本書では、神話と首長制をめぐる人類学者の探求や、ナヌメア環礁に暮らすナヌメア人の探求のみならず、ナヌメア環礁というホームランドを離れた首都在住のナヌメア人が探求に介入する過程も描かれる。本書の記述からは、これらの複数の主体による多様な探求が交錯するなかで、神話と首長制の「真実」がその都度生み出される様相が明らかにされる。このような複数の探求という視角は、本書の構成にも反映される。現地コミュニティの概況を示す諸章（第一部）に続く民族誌部分が、神話と首長制を探求する主体ごとに記述されるのである。具体的には、西洋人研究者による神話と首長制の探求（第二部）、首都在住のナヌメア人による神話と首長制の探求（第三部）、ホームランドのナヌメア人による神話と首長制の探求（第四部）という 3 つのパートに分かれる形で記述が進

*KAWANO Masaharu　日本学術振興会特別研究員 PD ／京都大学大学院人間・環境学研究科
masa922@gmail.com

み、そのあとに終章が続く。

以下では、こうした構成に沿って本書の内容を概説する。本書は、序章に続き、4 部構成を取る 8 つの章、終章から成る。

序　章　神話と首長制をめぐる探求
第一部　ナヌメア
第 1 章　過去と現在
第 2 章　移動と島を越えた広がり
第二部　記録する――研究者の視点
第 3 章　研究されるツバル
第 4 章　ある人類学者のフィールドワーク
第三部　合意する――首都にて
第 5 章　神話の憲章作成
第 6 章　首長制の成文化
第四部　実践する――ナヌメアにて
第 7 章　調査を始めた元調査助手
第 8 章　首長になれない男の主張
終　章　探求の「真実」

序章ではまず、著者が神話と首長制に関する探求を始めた経緯が語られる。著者によれば、ナヌメア環礁の住民は神話と首長制を語る際、著者に先行する人類学者であるキース・チェンバース（以下、キースとする）の民族誌に言及し、さまざまに論評していたという。さらに、彼らはキースの民族誌を参照するのみならず、神話と首長制に関する「真実」を自ら調査し、時に自らが発見した「真実」を証明しようとしていた。本書はこのような著者の気づきに導かれながら、ナヌメアに暮らす人々のみならず、首都在住者や西洋人研究者も含めた「多様な探求同士の重なりとズレ、あるいは交渉の過程」（14）に焦点を合わせて、神話と首長制をめぐる探求の様相を描写する民族誌である。

こうした本書の企図は、オセアニア地域の人類学的研究のなかで指摘されてきた伝統文化の可変性という論点に対して、「真実」の探求という新たな視点をつけ加えるものとして位置づけられる。著者によれば、伝統文化の可変性には、政治的な立場性に応じた創造性と、実践の現場に応じた柔軟性という 2 つの側面がある。1980 年代以降に隆盛した「伝統の創造」論や「伝統の政治」論では、伝統文化の創造をめぐる政治性が議論の焦点となった。その一方、そうした議論自体を批判する人類学者は、伝統文化の柔軟性に生活世界の「真正性」を読み取ることによって政治性を回避しようとした。著者はそれらの議論を踏まえたうえで、伝統文化の真正性を問う視点だけではなく、当事者が日常的な実践のなかで伝統文化の「真実」をいかにつくりあげているのかを問う視点の必要性を提起する。こうして、当事者による知識の構築に注目する視座――「ある文化集団による知識の理論化の方法」（13）としての「土着の認識論」（indigenous epistemology）に立脚する視

座――から、神話と首長制に関する探求を民族誌的に解明するという本書の指針が示される。

第一部では、ツバル・ナヌメア環礁の今日的な社会状況がその歴史的変遷とともに示される。第 1 章では、キリスト教の受容とイギリス植民地統治のなかで首長制が変遷した様子が概説される。キリスト教が島の政治に影響を与え、植民地行政府が任命した判事やカウンシルが権限を握るなか、ツバルの首長制は形骸化し、1957 年に廃止に至った。一度廃止された首長制だが、1978 年のツバル独立時における伝統文化の見直しに伴い、復活を遂げた。その際、国政レベルで民主主義的な制度が採用された一方、地方自治のレベルでは、植民地統治下で導入されたカウンシルに加え、首長制や集会所での合議という伝統的な制度を取り入れることが規定された。さらに、1997 年の地方自治法改正に伴い、カウンシルにおける決定も集会所での島会議に委ねられ、島会議は首長クラン会議の管轄とされた。本書における神話と首長制の探求とは、このような今日的な制度のもとで実践されるものである。

第 2 章では、現金経済の浸透と人口移動を主要因として、首長制を支えるコミュニティのあり方が変容した過程が描かれる。1970 年代以降にツバルの首都フナフティに多くの離島出身者が流入し、近年でも、離島における貨幣経済の浸透に伴って人口移動は増加の一途である。人口移動の結果として、2012 年時点で、首都フナフティには 1000 人を超えるナヌメア人が独自にコミュニティを形成し、その人数はホームランドに住むナヌメア人のおよそ 2 倍となった。彼らは時折ホームランドの政治に介入し、神話と首長制をめぐる探求に関与する。著者はこの状況を踏まえ、神話と首長制をめぐる探求をホームランドに限定せず、首都在住のナヌメア人や、外部の研究者との関わりのなかに位置づけなければならないと指摘する。こうした視角は、以下に続く民族誌の基本設定となる。

第二部では、神話と首長制をめぐる最初の探求として、西洋人研究者による調査研究が取り上げられる。第 3 章では、植民地期からポスト植民地期に至る政治状況の変化のなかで、西洋人研究者による探求がいかに行われてきたのかが概説される。人類学者による伝統文化の探求は、当初は植民地統治に有用な資料の収集という植民地行政府の方針と一体であったが、1970 年代以降には、個々の研究者の多様な関心のもとに民族誌的な調査が実施された。1978 年の独立前後からは、ツバル人自身の手による研究が登場し、ツバルの歴史研究や、ローカル・ガバナンスのあり方に関する提言が発表された。同章ではこのように、その時々の政治状況を背景とした関心のなかで研究者が伝統文化を文書の形で記録していく様子が述べられる。

第 4 章では、今日のナヌメア人も参照する英語の民族誌『テホラハの子供たち』（1984 年）の作者として、キース・チェンバース（以下キース）が取り上げられる。彼の調査開始後しばらくして、島会議の場で首長クラン会議が廃止された。キースはこの出来事を機に、神話・首長制・地縁集団に関する伝統文化を再構成するサルベージ民族誌を志向するが、彼の意図に反して、神話には多様なバリエーションがあることがわかっていった。そこで、キースは単一の「正統」な神話を見つけるという方針を放棄し、その代わりに、多様なバリエーションの背後に 2 つの主要な神話の対立という構図があると分析した。著者

は、このようなキースの民族誌が現地コミュニティにおいて多様な反応（肯定的に受け止める者もいれば、否定的に解釈する者もいる）を喚起している点に触れ、西洋人の人類学者が書いた民族誌が神話と首長制をめぐる議論の結節点になっていると論じる。

第三部では、首都在住のナヌメア人による「真実」の探求が取り上げられる。第 5 章では、伝統文化の消滅に対する危機意識から、首都在住のナヌメア人が神話の憲章を実用的なガイダンスとして作成する様子が描かれる。憲章作成は年長者への聞き取りに加え、植民地時代の行政文書や、人類学者の民族誌なども参照しながら進められた。この期間に、ホームランドのナヌメア環礁で神話と首長制をめぐる争いが何度か生じると、首都在住者による憲章作成はホームランドの政治への介入という色を強めた。著者によれば、このような介入を意図した憲章作成は、主要な神話間の対立を架橋する第三の神話や第四の神話の型を取り込むことによって、争いを調停する役割を果たした。著者はこうした分析から、憲章作成が神話の「真実」をめぐる合意の形成に貢献する一方、より多様な神話の取り込みを目指して「真実」が探求され続けていると論じる。

第 6 章では２回にわたる首長制の成文化を取り上げる。最初の成文化は、島の宗教（ツバル・キリスト教会）とは異なるセブンスデイ・アドベンティストの布教団の到来に際して、1994 年に島内で起きた争いを受けたものである。この時、布教団の受け入れをめぐり島内が二分され、反対派が新たに別の首長を即位させたことにより、2 人の首長が並立するという事態になった。首都在住のナヌメア人はこれを問題視し、首長の即位と退位において特定クランが果たす役割を成文化した合意書を作成した。二度目の成文化は、特定クランの主導により首長が即位した結果として、2002 年に島が二分されたという出来事を受けてなされた。首都在住のナヌメア人は集会所の役割を見直し、首長の即位に関して集会所での合議や、特定クラン以外のクランの意見を尊重する規定を盛り込んで合意書を改正した。著者はこれらの事例から、首長制の成文化は、首都在住のナヌメア人の影響力増大のためではなく、その時々の政治的な争いを調停する形で構想されてきたと論じる。

第四部では、ホームランド在住のナヌメア人による「真実」の探求が取り上げられる。第 7 章では、キースの元調査助手であるライナという男性が独自に「真実」の神話を探求する過程が扱われる。キースの帰国後、ライナの父は、キースが収集しえなかった神話をライナに教えた。衝撃を受けたライナは、人名の意味論などにもとづくナヌメア固有の「知る方法」に則って調査を進め、父の神話における首長のあり方を「真実」として見出していった。さらに、ライナは 2002 年に首長として即位した際、自身の即位と島の豊饒性を関連づけて語ることによって、自身が首長位にふさわしいカタ（ポリネシア一般におけるマナに相当）を持つ人物であることを印象づけていった。著者はこうした過程について、ナヌメア固有の「知る方法」から得られた情報や、超自然的なカタの効果を「証拠」としながら、神話の「真実」をめぐる複数のバリエーションのなかから、自身の神話が「真実」であることを「証明」していく過程であったと論じる。

第 8 章では、憲章作成やキースの調査などの文書記録化によってすくいあげられることのなかった神話の伝承者が取り上げられ、その人物がいかにして自らの神話を実践したのかが検討される。この伝承者は、憲章や民族誌に記載されなかった自身の神話を示しつ

つ、批判的な吟味を通じて、その他の神話が「真実」ではないことを主張していった。さらに、彼は自ら主催した島会議において、水不足により豊饒性が失われていた島の現状を引き合いに出し、島の豊饒を保障するはずの「真実」の首長が不在であることに原因を求めた。そのうえで、彼は自らが推薦した新たな首長を即位させ、その首長が島に豊饒をもたらすならば「真実」の首長であると主張した。著者はこの伝承実践について、ナヌメアの論理にもとづきつつも、自らのものとは異なる神話と首長制の「真実」の可能性を不確実にすることを通じて、自らの神話と首長制を「真実」に近づける実践であったと論じる。

終章において、著者は、西洋人研究者による探求、首都在住のナヌメア人による探求、ホームランド在住のナヌメア人による探求が個別に生起するわけではなく、ミクロなポリティクスのなかで互いに関係づけられながら実践されると論じる。その反面、「真実」の探求が続けられれば続けられるほど、得られた情報が積み上がり「真実」は不確実になる。著者はこうした傾向をとらえ、彼らの探求がつねに暫定的で不確実であるからこそ、「真実」をめぐる探求が続けられると結論づける。最後に、著者は自身の調査を振り返り、著者の探求自体も神話と首長制をめぐる多様な探求の一部であったと位置づける。

*

20 世紀後半に植民地統治から独立し近代国家の体裁を整えたポスト植民地国家のなかには、近代国家の原則からみれば異質な原理である首長制を内部に抱える社会も少なくない。著者も言及するリンドストロームとホワイトの有名な研究が示すように、〈今日の首長〉のあり方はかつての民族学的な類型論に収まらない多様性を有し、在来の制度と西洋的な制度の歴史的もつれ合いのなかで存立している［Lindstrom & White 1997］。ツバルにおける〈今日の首長〉も過去から変わらずに持続するものではなく、イギリス植民地統治下で一度廃止されたものが独立を境に復活させられたものであり、植民地統治や国家建設と不可分であるといえる。本書はその点が十分に踏まえられた民族誌であり、キリスト教受容、植民地統治、西洋人による調査研究、独立国家における都市化と地方自治などと重なり合うものとして、神話と首長制に関する探求が描き出されている。この点において、ナヌメアの神話と首長制をめぐる探求を描く本書は、オセアニア地域における〈今日の首長〉のひとつの姿を知るうえで貴重な民族誌であるといえる。

評者のみるところ、本書の民族誌的な記述には、今日において神話と首長制を探求するのは〈誰か〉という問いが通底している。そのような問いに支えられているから、探求主体ごとに分けた章構成に沿って、議論が進められているのだと推測される。多様な探求主体という視角こそが本書の議論を独自なものにしており、それによって、神話と首長制の「真実」という古典的な問いをポスト植民地期の今日的な条件下でとらえなおすことが可能になっているといえる。

とりわけ本書のなかで興味深かった点として、ナヌメアにおける首長制と神話の「真実」をめぐる探求のなかに、調査や観察を通じて経験的な証拠を集めることにより客観

的・科学的に事実を確定するという実証主義的な探求の論理とは異なる、複数の正当化の論理が介在していた点である。たとえば、首都在住のナヌメア人による探求においては、「正統」な神話よりも島内の合意を優先する形で憲章作成が進められ、そのような合意の政治が神話の「真実」を正当化する様子が描かれる。さらに、ホームランドのナヌメア人による探求のなかで描かれたように、過去から口承で伝えられてきた神話の正統性のみならず、首長位にある人物が持つとされる超自然的な力としてのカタの効果が神話の「真実」を正当化する役割を果たしていた。他方、調査研究を通じて文字化された民族誌的な記録や、首都で成文化された憲章が、上の世代から口承で伝えられてきた「真実」の補完物として、神話や首長制の「真実」を正当化する「証拠」に採用されていた。

著者の試みはポスト植民地期の首長制研究として一定の成功を収めているが、本書の事例からは、著者の設定とは異なる視角から記述・分析を展開できたのではないかという疑問も浮かぶ。たとえば、上述した複数の正当化の論理という点に注目すれば、著者の念頭にあったと思われる〈誰が真実を探求するのか〉という軸ではなく、〈真実を正当化する論理はいかなるものであるのか〉という軸に沿って本書を構成することもできたと考えられる。つまり、〈口頭伝承による正当化〉〈文字記録による正当化〉〈合意による正当化〉〈超自然的な力による正当化〉といった複数の正当化の論理のもつれ合いとして、本書の記述や分析を展開することもできたのではないだろうか。

とりわけ、もともと口承で伝えられてきた神話と首長制の実践において、西洋から伝えられた文字や印刷メディア、映像メディアといった、活字や映像にもとづく媒体が、現地コミュニティにおける「真実」の正当化にもたらす影響は大きい。こうした正当化の論理の交錯について考察を深めることによって、神話と首長制をめぐる探求のなかに、個々の探求者間の関係にとどまらない、歴史的もつれ合いの複雑な様相を見出せるはずであると、評者は考える。

本書のもうひとつの貢献として、西洋人の人類学者による民族誌が現地コミュニティに多様な反応をもたらす諸相を具体的に跡づけたことがあげられる。これにより、本書を手に取る読者は、人類学者の民族誌と現地コミュニティとの関係性について改めて考えるきっかけを得ることになるだろう。この点においても、本書は魅力的な作品である。

ただし、著者自身による民族誌的な記録が現地コミュニティと取り結ぶ関係については、それほど明確になっていない。本書では、たとえば著者が歴代首長についてまとめた文書を現地住民に渡したというエピソード（52）も紹介されるが、それは神話と首長制をめぐる探求にいかなる影響を及ぼしたのであろうか。また、キースの民族誌はツバル語のトランスクリプトを掲載しつつ、英語によって書かれたために、現地住民にもアクセス可能なものであった。それに対して、著者自身には、たとえば日本語で書かれた本書を英語やツバル語に翻訳し、現地住民にアクセス可能な記録として提示する用意があるのだろうか。著者自身による「真実」の探求は、現地コミュニティにおける「真実」の探求のなかで、いかに参照されるのであろうか。神話と首長制をめぐる多様な探求のなかで、本書自体はどのような関係性の一部になっていくのか。そのような本書のゆくえも興味深い。

ポスト真実の時代ともいわれる現代政治において、真実とは何か、真実を探求するとは

いかなることかという問いはますます重要性を増しているように思える。そのような意味で、非西洋社会における「真実」の政治を対象に、「真実」の探求なるものを人類学的に考察しようとする著者の研究の意義は極めて大きいと考えられる。評者としては、著者による「真実」の探求がどのように進展していくのか、今後の展開を楽しみにしたいと思う。

＜参照文献＞

Lindstrom, Lamont & Geoffrey White 1997 Introduction: Chiefs Today. In Geoffrey White and Lamont Lindstrom eds. *Chiefs Today: Traditional Pacific Leadership and the Postcolonial State.* Stanford: Stanford University Press, pp. 1-18.